

所員の研究、試験および検査に関する発表を主とする「衛研例会」は、昭和26年から原則として毎月第2火曜日、第一会議室において開催されているが、平成13年度に行った演題は次のとおりである。

#### 第430回（平成13年5月15日）

1. ヒト資料を用いた研究に関する政府等ガイドライン  
変異遺伝部 増井 徹
2. コメットアッセイ法による照射牛肝の検知  
食品部 宮原 誠
3. プリオン感染と検出法  
食品添加物部 山崎 壮
4. 抗ペプチド抗体を用いたプリオン蛋白質の高感度検出法の開発  
衛生微生物部 武木田 薫  
菊池 裕
5. 転写因子 Mesp2 及び Pararis のダブルノックアウトマウスの解析  
毒性部 高木 篤也
6. 毒性部の紹介  
毒性部 井上 達

#### 第431回（平成13年7月10日）

1. ラット気管上皮粘膜層の電気生理学的パラメータにおけるストレスの影響  
食品部 穂山 浩
2. Microdissection法を用いたパラフィン包埋微量組織からのRNA、蛋白質、DNAの解析について—メタカーン固定法の利用—  
病理部 渋谷 淳
3. 非経験的フラグメント分子軌道法を用いたエストロゲン受容体—リガンド結合エネルギーの理論計算  
化学物質情報部 中野 達也
4. ホルムアルデヒドの経口および吸入暴露による毒性評価と水道水における暴露評価  
総合評価研究室 広瀬 明彦
5. A環修飾活性型ビタミンD<sub>3</sub>誘導体のVDR結合モデル  
有機化学部 栗原 正明
6. 衛生微生物部の紹介  
衛生微生物部 棚元 憲一

#### 第432回（平成13年9月11日）

1. 概略と研究体制  
機能生化学部 澤田 純一
2. 遺伝子多型検出のストラテジー  
薬理部 小澤 正吾
3. チトクロムP-450遺伝子の一塩基置換による機能変

化の解析

- 機能生化学部 斎藤 嘉朗
4. 抗癌剤イリノテカンの解毒代謝に関与するヒト肝UDP—グルクロン酸転移酵素分子種とその役割  
環境衛生化学部 埴岡 伸光  
神野 透人
5. CYP3A4による新規イリノテカン代謝物  
代謝生化学部 佐井 君江
6. DNAChipを用いた遺伝子解析  
薬理部 石田 誠一

#### 第433回（平成13年10月9日）

1. プリオン病とプリオン蛋白質の生化学  
食品添加物部 山崎 壮
2. 培養細胞を用いた正常プリオン蛋白質発現機構の解析  
衛生微生物部 菊池 裕

#### 第434回（平成13年11月13日）

1. 生体影響としての内分泌かく乱化学物質問題の現状と展開  
毒性部 菅野 純
2. 白血球の分化に対する内分泌攪乱化学物質の影響  
代謝生化学部 渡辺 秀実  
鈴木 和博
3. ビスフェノールAの医療用具におけるリスク・ベネフィット解析  
療品部 薮島 由二  
化学物質情報部 関澤 純  
林 譲  
食品部 松田 りえ子
4. アフリカツメガエルの発生期における内分泌かく乱化学物質の影響  
環境衛生化学部 西村 哲治  
鈴木 玲央

#### 第435回（平成13年12月11日）

1. 細胞内情報伝達系に作用する南米産薬用植物の成分研究  
生薬部 川原 信夫
2. HPLCによる食品中のポリソルベート分析法  
食品添加物部 武田 由比子
3. 人工血小板の創製及び人工血管材料の血液適合性評価  
療品部 土屋 利江  
西谷 孝子
4. 療品部の紹介

療品部 土 屋 利 江

第436回 (平成14年1月15日)

1. 体験的創薬薬理学—in vivo から標的分子へ—

副所長 長 尾 拓

2. ATP受容体の生理・薬理機能研究：薬理部第一室の紹介

薬理部 井 上 和 秀

小 泉 修 一

小 濱 とも子

津 田 誠

重 本 由香里

(最 上)

3. 分子生物学的手法を利用した機能タンパク質発現系の薬理・毒性学的応用

薬理部 中 澤 憲 一

4. 薬理部の紹介

薬理部 大 野 泰 雄

第437回 (平成14年2月12日)

1. *gptdelta* ラット及びマウスを用いた臭素酸カリウム12週間投与による腎遺伝毒性の検索

病理部 岡 崎 和 志

西 川 秋 佳

広 瀬 雅 雄

2. *rasH2* マウスにBHTを組み合わせた肺発がん物質早期検出モデル開発の試み

病理部 梅 村 隆 志

3. 発がん性検出のためのToxicogenomics—ラットにおける非遺伝子傷害性肝発がん物質投与による発現遺伝子のプロファイリング—

病理部 洪 谷 淳

高 橋 則 行

有 村 卓 朗

4. Ethinylestradiol 周産期曝露によるラット新生児視床下部における遺伝子発現の検討

病理部 高 木 広 憲

榊 富 直 哉

畝 山 智香子

洪 谷 淳

5. DHPN誘発ラット甲状腺腫瘍のプロGRESSION課程におけるEGF/TSH receptorsの関与

病理部 今 井 俊 夫

6. 内分泌攪乱化学物質の卵巣摘出ラットにおける乳腺発がん修飾作用の検討

病理部 上 田 誠

今 井 俊 夫

7. 病理部の紹介

病理部 広 瀬 雅 雄

## 平成13年度 特別講演会開催状況

No.	開催年月日	講演者	所属	テーマ	経費
1	7月16日(月)	bruce blumberg,Ph.D	Univ of California Irvine USA	Retinoid Signaling in Vertebrate development	所予算
2	7月23日(月)	荻原 幸夫 教授	名古屋市立大学薬学部	What is "kanpo" medicine	"
3	9月25日(火)	松田 知成 助手	京都大学工学研究科附属環境質制御研究センター	ダイオキシン受容体に高親和性の生理的リガンドの同定	"
4	10月2日(火)	福島 昭治 教授	大阪市立大学大学院医学研究科都市環境病理学講座	環境発がん物質の低用量発がん性	"
5	10月16日(火)	赤池 敏宏 教授	東京工業大学生命理工学研究科生体分子機能工学講座	細胞マトリックス工学と肝臓組織工学	"
6	10月25日(木)	高井 貴子 助手	東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センターゲノムデータベース分野	機能ゲノム学とオントロジー	"
7	11月19日(月)	吉田 武美 教授	昭和大薬学部	薬毒物による酸化ストレスとその防御的応答としてのヘムオキシゲナーゼ誘導	"
8	11月22日(木)	正山 征洋 教授	九州大学大学院薬学研究院創薬科学専攻医薬化学講座薬用資源制御学分野	生薬の品質評価・鑑識とモノクローナル抗体の導入	"
9	1月28日(月)	Timothy R. Zacharewski	Michigan State University	内分泌かく乱物質とエストロゲン受容体の相互作用の分子機構とくに種差に注目して	"

## 支 所 例 会

## 第176回 (平成13年9月25日)

1. 脂質膜結合によって誘起されるアポEの構造変化  
薬品試験部 斎藤博幸
2. 各種食品中のフタル酸エステル等プラスチック可塑剤の分析  
食品試験部 津村ゆかり
3. マレーシアにおける食品衛生プログラムの強化プロジェクトへの参加  
食品試験部 吉井公彦
4. 塩化ジブチルスズの偽妊娠ラットにおける脱落膜反応に対する影響  
生物試験部 原園景

## 第177回 (平成13年10月23日)

1. 熱帯病に対する新たな治療薬の開発に関する研究  
薬品試験部 小出達夫
2. 食用黄色5号アルミニウムレーキの不適事例について  
食品試験部 辻澄子  
海野有紀子
3. 可塑剤ブチルベンジルフタレート of ラット雄胎児の性分化に及ぼす影響  
生物試験部 江馬真

## 第178回 (平成13年12月25日)

1. HPLCによる農産物中ハロスルフロンメチルの分析法の検討  
食品試験部 石光進
2. 病原性真菌 *Candida albicans* 由来の $\beta$ -(1 $\rightarrow$ 3)-D-glucanの発熱活性および炎症性サイトカイン産生誘導活性  
生物試験部 中川ゆかり

## 第179回 (平成14年1月29日)

1. ICH-Q7A: 原案GMPガイド

## Good Manufacturing Practice Guide for Active Pharmaceutical Ingredients

—製造工程管理への不純物プロファイルの適用—

- 薬品試験部 谷本剛
2. フタル酸エステル類 (プラスチック可塑剤) による食品汚染問題の全貌  
—平成10年~13年度厚生科学研究のまとめ—  
食品試験部 外海泰秀
  3. NCマウスケラチノサイトにおけるインターフェロン $\gamma$ の作用に関する研究  
生物試験部 天野博夫
  4. オリゴヌクレオチドの三重鎖形成能を利用した遺伝子発現制御  
—アンチジーン法の有用性—  
生物試験部 田中寿一

## 第180回 (平成14年2月26日)

1. 日局一般試験法「導電率測定法」の新規設定に関する研究  
支所長 岡田敏史
2. ラットにおけるタンニン酸の代謝について  
食品試験部 中村優美子
3. 黄色ブドウ球菌ペプチドグリカンによるI型ヘルパーT細胞機能の抑制について  
生物試験部 村井敏美  
中川ゆかり  
那須功二

## 支所特別講演会

平成13年11月27日

「骨組織におけるエストロゲンおよびエストロゲン誘導体の役割」

東京薬科大学薬学部第一生化学助教授 宮浦千里